

連続テレビ小説「ばけばけ」の世界と小泉セツと八雲の時代プレ展示

小泉セツの面影

12月26日に開催する企画展「連続テレビ小説『ばけばけ』の世界と小泉セツと八雲」に先んじて、松江歴史館で保管している小泉セツと八雲に関する資料を紹介します。

小泉八雲夫妻が美保関に滞在した際に、セツの髪結かみゆいをした恩田カネがセツからもらった髪飾り、恩田カネが当時を振り返って書いた文章を展示します。また、夫妻の息子で洋画家の清が両親の足跡を追い美保関を訪れた際に書いたスケッチを展示します。



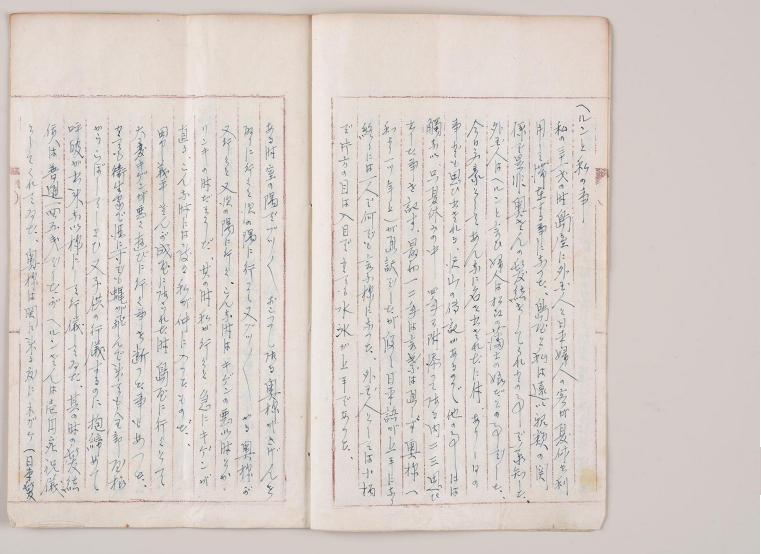
小泉セツが贈った髪飾り

小泉八雲とセツは美保関を三度訪れ、海水浴や休暇を楽しんでいます。美保関にある島屋しまやという旅館に滞在中、セツは髪結かみゆい（髪の毛の手入れ）を当地の恩田カネに依頼していました。セツは髪結のたびにカネへ髪結料とともに貝製の根掛ねがけ（髪飾り）を手渡しました。のちにカネは根掛けを数珠に作り変えて使用していました。

恩田元穂所蔵（松江歴史館寄託）

私の三十一才の時、島屋に外国人と日本婦人の客が夏休を利用して滞在する事になった、島屋と私は遠い親類の関係では非奥さん（小泉セツ）の髪結をしてくれとの事で承知した、外国人はヘルンと言ひ、婦人は松江の藩士の娘だと事でした、今日文豪としてあんなに名をだされたに付、ありし日の事ども思ひ出される、沢山の伝記があるの他の事には触ない、只夏休みの中四年間附添つて居る内二三思ひ出した事を記す、最初一二年は言葉は通じず奥様（私より一ツ年上）が通訳でしたか段々日本語が上手になり終りには一人で何でも言ふ様になつた、外国人としては小柄で片方の目は入目でとても水泳が上手であつた、

ある時部屋の隅でブツ／＼おこつて居る、奥様がきげんを取りに行くと次の隅に行つて又ブツ／＼やる、奥様が又行くと次の隅に行く、こんな時はキゲンの悪い時とかリンキの時だそうだ、其の時私が行くと急にキゲンが直る、こんな時には私が仲に入つたものだ、田中義平さんが成屋に居られた時島屋に行くとて大変キゲンが悪く遊びに行く事を断つたこともあつた、とても衛生家で酒に一寸でも蠅が飛んでも來ても全部屋根からこぼしてしまひ、又子供の行儀するのに抱締めて呼吸が出来ない様にして行儀していた、其の時の髪結は普通一回四五銭でしたがヘルンさんは壱円宛祝儀としてくれてゐた、奥様は岡に来る度にネガケ（日本髪に使用するもの）を御土産としてもらつてゐたが、今では必要がないのジユヅを造つて今でも持つて居る（後略）



小泉八雲とセツの印象

しまや
美保関の旅館島屋で小泉セツの髪を結っていた恩田カネが、後年八雲夫妻のことを思い出しました文章である。それには初めて会ったとき（明治24年）は言葉が通じなかつたが、徐々に通じるようになつたこと、水泳がうまかつたこと、憤氣（りんき）（やきもち）で怒つてること、潔癖で虫が入つた酒はすべて捨てていたことなど、生き生きとした八雲とセツの様子を記す。

恩田元穂所蔵（松江歴史館寄託）

小泉清 スケッチ画



関の五本松



嫁ヶ島



カネさんの肖像

小泉八雲の三男である洋画家の清（1899～1962）は、八雲の没後50年に際し父の面影を追ってスケッチ旅行に出た。美保関に来訪した際に恩田カネを訪ね、その場で携帯していた矢立てで描写した。現在、島根県立美術館ではコレクション展「小泉清—小泉八雲とセツの三男として生まれて—」を開催中です。

恩田元穂所蔵（松江歴史館寄託）